

Infolettre de l'AJEQ

Association japonaise des études québécoises

日本ケベック学会ニュースレター

2023 年 大会特集号

第 14 巻第 2 号 (通算 37 号)

2024 年 3 月 30 日発行

2023年度 全国大会特集号

2023 年度全国大会

—AJEQ 設立 15 周年記念大会—を振り返って

丹羽 卓 (金城学院大学)

今年には日本ケベック学会設立 15 周年にあたります。その記念すべき大会を 2019 年以来 4 年ぶりに元通りの形で開催できたことをまず嬉しく思います。2020 年と 2021 年はオンラインでの大会でした。昨年は対面とオンラインのハイブリッド大会で、対面でも開催できたもののマスク着用で懇親会もできませんでした。今年には、対面での開催で、マスク着用の義務もなく、懇親会もできました。韓国ケベック学会からもオンライン参加でなく、KIM Minchai 先生が来てくださり、交流できたことも大きなことでした。人が顔と顔を合わせて直接話ができ、杯を酌み交わすことができるということにどれほどの意味があるかは、長く続くコロナ禍を経て初めて分かったことです。

今回の大会は、会場として歴史ある聖心女子大学をお借りできました。開催校代表のコルベユ理事とお手伝いの 3 名の学生さんには、行き届いたご配慮をいただき感謝しています。また、今回の大会準備中に想定外の変更が相次ぎ、杉原企画・実行委

員長をはじめ、準備に携わってくださった委員の方々には大変なご苦勞をおかけしました。しかし、「終わり良ければ総て良し」で、そのご苦勞が十分報われた大会だったと思います。

今年が日本ケベック学会設立 15 周年だということは冒頭に書きましたが、実は大会プログラムの表紙のロゴが示すとおり、国際ケベック学会の設立 25 周年、開催校の聖心女子大学も創立 75 周年、ケベック州政府在日事務所が東京に設置されて 50 周年です。よくもこれだけ周年が重なったものですが、まさにそれらを記念するに値する大会でした。



●本号の内容●

巻頭言 (丹羽卓) … 1

全国大会各セッション報告… 3

特別寄稿 (竹中豊) …10

開会式 (左上から時計回りに、総合司会の西川葉澄会員、シェニエ・ラニサール・ケベック州政府在日事務所代表、スティーブ・コルベユ副会長、丹羽卓会長)

今大会のテーマは「日本とケベックにおける先住民の文学・文化的対話」。昨年、日本カナダ学会では「アイヌ民族の先住民権回復を目指して」、オーストラリア学会では「日豪の先住民研究における『応答』」と題するというシンポジウムが持たれました。このように、今「新大陸」における先住民に関心が向いているのは、日本でもやっと先住民が日の当たるところに少し置かれるようになったことの反映でしょうか。日本でアイヌ民族が先住民として認められたのは 2008 年。2007 年の国連の「先住民族の権利に関する国際連合宣言」を受けてのことでした。それよりもはるか以前から良きにつけ悪しきにつけいろいろな形で先住民と向き合ってきた「新大陸」の国々の取り組みに比べれば、日本は周回遅れも甚だしいですが、それだからこそ今アイヌ民族のことを少しでも知り、その問題について考えるのには深い意味があると考えます。

大会テーマに合わせて、予定をしていたケベックからの基調講演者が来日できなくなり基調講演がプログラムから消えてしまったのは残念でしたが、シンポジウムの 3 つの発表が充実した内容で、いくつも学ぶ点がありました。また、3 つの自由論題のテーマも幅広い分野にかかわる研究で、学際的学会である AJEQ にとって意義あるものだったと思います。シンポジウムと自由論題の発表の内容は本ニュースレターの別項に譲るとして、AJEQ の設立 15 周年企画について次に書きたいと思います。

今大会のプログラムには昼食後「学会設立 15 周年記念企画」というコーナーが置かれました。AJEQ は、5 年前に設立 10 周年事業として、非常に充実した企画をいくつも行いました。そこから 5 年。今度は設立 15 周年に向けて故立花英裕前会長を中心としていくつかの企画が計画され、立花先生が亡くなった後も、学会をあげてその遺志を実現すべく取り組んできました。このコーナーはその成果を披露する場として設けられたのです。15 周年事業には次の 4 つの企画があります。①ジャック・ラクルシエール著『ケベックの歴史』(水声社)の出版(翻訳は小倉和子、小松祐子、古地順一郎、伊達聖伸、矢内琴江の各会員)、②日本ケベック学会編『ケベックを知るための 56 章』(明石書店)の出版(編集責任は矢頭典江と大石太郎の両会員。編集は飯笹佐代子、神崎舞、近藤野里、古地順一郎、真田桂子、廣松勲の各会員)、③ケベック研究関連書誌の作成(編集責任は真田佳子副会長)、④学会ホームページの更新(担当は小松祐子広報委員長)。これらについての説明に先立って、AJEQ の思い出の写真を示しての、村石麻子理事による過去 5 年間の活動報告と、加藤晋監事によるそれ以前の歩みの振り返りもなされました。こうした成果と過去の活動を振り返ることを通して、AJEQ が 15 年間間違いなく成長したことを実感しました。この記念事業を統括してくださった真田桂子副会長はじめ、各企画の実現に尽力くださった方々には本当に感謝します。

そして、懇親会のことには触れないではいられません。昨年はハイブリッド開催だったため懇親会は行われず、その前 2 回の大会はオンライン開催で、懇親会もオンラインでした。3 年の間を置いて行われた対面による懇親会。人と人が同じ空間を共有し、語り合い、笑い合い、交流するというこの意味をこれほど痛感したことはありません。大会出席者に対する懇親会出席者の割合も、これまでになく高かったように思います。対面による懇親会への期待がそれだけ大きかったのでしょう。

最後に、反省点と今後のことについて。杉原理事が委員長を務められた今回と前回だけでなく、私が委員長を務めていた 5 年間、そして多分それ以前から、企画委員会には一定期間に業務が集中する一方で、次の大会の企画が遅れるという問題があったことを認識しています。それは、企画委員会に開催校代表など若干名が加わる形で企画・実行委員会が形成されるため、必然的にそうになってしまうのです。その結果、企画・実行委員会の方々には大きな負担がかかり、大会終了時には疲弊してしまうということになりました。この点を何とかしなければならぬと考え、理事会では企画委員会と実務委員会を分離し、業務を分担する方向で検討を始めました。そのためには、理事・役員だけでは人員不足に陥りますので、一般の会員の方々にも委員会に加わっていただく必要があります (今も委員になっていただいている方が若干名あります)。

これから今年度および来年度の運営体制を構築していきますが、この問題を踏まえて、会員の皆さんの協力を仰ぐ必要があります。事情をご理解いただき、ぜひともご協力いただきますよう、よろしくお願いいたします。

(日本ケベック学会会長)



<各セッション報告>

2024 年度全国大会は、ケベック州在日事務所代表シェニエ・ラ＝サール氏ならびに共催校代表のスティーブ・コルベユ副会長のご挨拶に始まり、自由論題、15 周年記念企画報告およびシンポジウムで活発な議論が繰り広げられました。以下は、それぞれの司会者からの報告です。

自由論題セッション

司会：廣松 勲 (法政大学)

自由論題においては、ケベック研究の広がりを感じさせる 3 つの発表がなされた。まずは、木下晴美会員の発表は「どのようにミュージアムはカナダ先住民をルーツとするコンテンポラリーアーティストの作品を展示するのか」であった。近年、文学の領域に限らず、先住民系のコンテンポラリーアーティストの活躍も目覚ましい。本発表では、当該領域において存在感を高めるため、マイノリティーに属するアークティス

トたちの作品がどのような形で展示されているのかについて、具体的な事例

(「Sakahana : 国際的な先住民アート」展と「ビート・ネイション : アート、ヒップホップ、先住民文化」展) の検討をしつつ、詳細に説明がなされた。特に、今回は先住民系のコンテンポラリーアーティストの作品群を閲覧する貴重な機会であっただけでなく、美術館における展示が作品に留まらず、アーティストそのものの社会的価値づけと密接にかかわっていることに目を開かされた思いであった。筆者の関心からは、先住民系アーティストやキュレーターの展示へのかかわり方が、文学分野における作家や編集者の出版へのかかわり方と、どのような共通点や差異があるのかについて考えさせられもした発表であった。

もう一つの発表は、吉田悠佑会員と名取伸子会員によるもので、「ケベコワのセクシャルヘルス&ライツに関する一考察 : 日本との比較を通じて」と題したものであった。本発表は、これまでAJEQの研究会や全国大会においても触れられることのなかった、ケベックにおける性教育の実態に迫るものであった。発表では、日本のケースがその社会的背景とともに説明された上で、ケベックにおける「包括的性教育」と呼ばれる取り組みについて詳細に説明がなされた。双方のケースにおいては未だ課題が残っているのが現状ではあるが、どちらかといえば日本よりケベックにおいては、セクシャルヘルス&ライツやSOGIに関し

てはより高く意識化が進んでいる状況を見て取ることができた。このような教育現場における性に関する取り組みの違いがケベックと日本における対人関係の違いの一部を構成していると考えれば、この分野における研究・調査がさらに進むことで、ケベック社会の在り方の興味深い側面をさらに深く理解させてくれるのではないかと思われた。

最後に、韓国ケベック学会 (ACEQ) のキム・ミンチェ会員 (慶熙大学校) より、「モンレアルのアフリカ人ディアスポラ : 言語多様性の分析」と題して発表がなされた (発表はフランス語)。アフリカ人ディアスポラと言語景観という観点に基づきながら、特にモンレアルにおける言語的多様性を明らかにしようとするものであった。統計資料を通じてアフリカ人ディアスポラの状況を確認した上で、彼らがどのようにして単一言語空間と多言語空間を行き来するのかについて、街中の (飲食店と食料品店の) 看板を観察しつつ詳説された。ケベック社会が多言語空間を必ずしも抑制するのではなく、実際にはそれを許容するような形であることを具体的に事例とともに知ることができた点は非常に興味深かった。さらに、「超多様性」 (Vertovec 2007) を帯びるようになったとされるモンレアルという都市が、今後のケベック社会の未来を予測しているのか、それともより厳しい単一言語政策が実施される前触れであるのかについても考えさせられる発表であった。

以上の通り、今年度の自由論題は、これまで以上に今後のケベック研究の広がりを感じさせる充実した内容であった。



自由論題 (左上から時計回りに、司会の廣松勲副会長、木下晴美会員、キム・ミンチェ氏、吉田悠佑会員と名取伸子会員)



15 周年記念企画報告①

司会：真田 桂子 (阪南大学)

AJEQ の 15 周年記念企画委員長を拝命し、15 周年記念書誌の編集に携わった。編集委員会は、真田を委員長として、荒木会員、大石会員、片山会員、近藤会員、佐々木会員、コルベユ会員にご協力を頂いて立ち上げた。

今回の書誌編纂のプロセスといささかの

苦労話を披歴させて頂くと、まず今回の書誌にまとめるものは、原則として AJEQ 会員の日本におけるケベック研究についての業績で、10 周年記念書誌が編纂された 2018 年以降のものとすることにした。次に、会員諸氏の業績をどのように収集し、どのような形式にまとめるかを検討した。収集の方法として、google フォームなどの WEB サイトを利用することを検討したが、ケベック研究の業績は、タイトルを始め言語も多岐にわたり、情報も細かく複雑であるため、google フォームでの収集はあきらめた。一方で AJEQ10 周年記念書誌編集委員会が作成した WORD 文書の書誌入力フォーム等を小倉会員から情報提供して頂き、それらを少し改編して使わせて頂いた。おかげさまでとてもスムーズに関連文書を準備することができた。さらに 15 周年の書誌は、AJEQ10 周年記念書誌のスキームを踏襲し、最終的にそれに追記する形となった。また書誌情報は、新たな専用の G メールアカウントを作成し、そこに集約して提供してもらうことになった。

前回の 10 周年記念書誌作成から 5 年しか経過していなかったため、どれくらいの書誌情報が集められるか心配であったが、実際には予想に反して多くの情報が集まり、10 周年の書誌より 10 頁近く追加された。特に若い世代の会員からの業績の申告が目覚ましく、前回にはなかった分野での業績が数多く申告されたことも特筆すべきことであろう。とりわけ、教育、宗教と倫理、博

物館学、フェミニズム、フランコフォニーなどの新分野での業績が顕著であった。書誌の分野別の分類は、前回の 10 周年のカテゴリーを踏襲し、「ケベック全体」「地理・歴史」「政治・経済・宗教・社会」「芸術」「文学」「その他」としたが、今回の書誌編纂の折には、新分野での業績の台頭に呼応したカテゴリーの再考が求められると感じた。また近年のケベック研究の業績は、間文化主義、多文化共生、フランコフォニーやフェミニズムに至るまで、カナダ、ケベックの研究者に向けてだけではなく、広く一般にも発信する価値のあるものが多く生み出されており、今後、この書誌情報の開示をどのようにしていくか、検討する必要があると感じた。

いずれにせよ、今回の書誌情報の編纂を通して、ケベック研究が若い世代を中心に目覚ましい発展を遂げていることを実感し、学会会員を始め、少しでもケベック研究に関心を持つ多くの方々に開かれ、その研究の発展に寄与することを心から願う次第である。

15 周年記念企画報告②

司会：村石 麻子（福岡大学）

15 周年記念企画として、加藤監事と村石がこれまでの軌跡を振り返るアルバムを作成した。まず 10 周年記念の 2018 年から昨年度の 2022 年までの大会の学術内容を村石が概観し、2008 年来長きに亘り会員である加藤監事は、2008 年学会創設時と近年の

懇親会の様子を回顧した。設立委員会の写真には、故小畑精和初代会長、故立花英裕前会長、今回の記念大会にもご足労頂いた日本カナダ学会顧問の竹中豊名誉会員を始め、会長・副会長を歴任された小倉和子顧問、矢頭典枝理事の姿もあり、本学会の歩みを見て取ることができた。

直近 5 年間の大会を思い起こせば、まずテーマの多様性とそれに準じた基調講演・シンポジウムの充実ぶりに驚かされる。2018 年は愛知大学にて、ケベックを代表する歴史社会学者ジェラルド・ブシャール教授を迎えて、「グローバル化時代の国民国家神話」のテーマで、ケベックの多文化主義に始まり、戦後日本の神話、ライシテとイスラム、アフリカ独立にまでコーパスが及び、多角的に議論がなされた。翌 2019 年は立教大学にて、アカデミー・フランセーズ作家ダニー・ラフェリエール氏を迎えて、亡命経験と書くこと、観光産業の現状から大航海時代の探検家、文学から読み解く自然景観、旅行記と創作活動まで、「旅」をテーマに議論は多岐に渡った。

続く 2020 年はオンライン開催により、シルク・ド・ソレイユの現況に詳しい西元まり氏を迎え、コロナ禍における音楽・映画・演劇など舞台芸術の役割が問い直された。翌 2021 年も遠隔開催により映像文化をテーマに、映画評論家クロード・ブルアン氏、アニメーション作家の山村浩二氏の登壇も叶い、鑑賞者だけでなく作り手の視点からも現代の映像制作の諸問題が検討された。

昨年 2022 年は関西学院大学にて、フランス語教育をめぐりフランソワーズ・アルマン教授を迎え、インクルーシヴ教育、FLE 教科書、大学教育、イマージョン教育など、多文化共生の理念に即した語学教育の諸相が考察された。

こうした実り多い大会が続く一方、コロナ禍という災厄に見舞われた時でもあった。2020 年と翌 2021 年はオンライン開催、また遠隔と対面のハイブリッド開催を余儀なくされたが、技術的困難にもかかわらず無事開催に至ったのは、ひとえに企画運営に携わられた実行委員会のご尽力によることを強調したい。

そして 2021 年には大黒柱として学会を牽引されてきた立花前会長が亡くなられた。先生は研究の裾野が広く、ケベックのみならずアフリカも含めた仏語圏文化全般に通曉し、ブルデューなどフランス社会学を紹介するほか、仏政府功労賞を授与されるなど教育分野でもその貢献は大きい。学問の先達である先生を喪ったことは我々にとって大きな痛手となったが、ケベック学の普及を通じてさらなる世界理解、国際親善に努めることが最大の恩返しとなるならば、会員一同微力ながら学会の発展に寄与すべく、今後とも積極的に知見を広げ、日々の研究活動に邁進したいとの思いである。



学会設立 15 周年記念企画 アルバム紹介、書誌紹介(左上から時計回りに、加藤晋会員、真田桂子副会長、村石麻子会員)



シンポジウム：

「日本とケベックにおける先住民の文学・文化的対話」

司会・コーディネータ：小倉和子（立教大学）

今年度の全国大会では「日本とケベックにおける先住民の文学・文化的対話」と題するシンポジウムが開催された。今回、このようなシンポジウムが企画されたきっかけには、2冊の本の翻訳があった。1冊目はダニエル・シャルティエ（ケベック大学モンレアル校教授）のマニフェスト的テキスト『北方の想像界とは何か？ 倫理上の原則』である。シャルティエは 2019 年春の来

日の際に本学会でもケベック先住民の文学状況に関する講演を行ってくれたが、その来日に合わせて河野会員と小倉でこのテキストを日本語訳した。それが主張しているのは、これまで北方先住民の世界は長いあいだ西欧の芸術家や作家たちなどの外部の視線によって単純化されて表象されてきたが、じつはもっと複雑であり、先住民たち自身の内部からの視線によって見直される必要がある、ということだった。と同時に、地球上に住む先住民には共通の経験や課題も多いため、民族間の交流を深めていく必要性も説いていた。シャルティエが北方・冬・北極の想像界国際研究所を立ち上げ、このテキスト自体がすでに 16 の言語に翻訳されていることは、そうした先住民族間のネットワーク作りの一環でもある。

2 冊目は土橋芳美の叙事詩『痛みのペンリウク—囚われのアイヌ人骨』である。シャルティエの前回の来日の際、われわれはジェフリー・ゲーマン教授 (北海道大学) と知り合った。彼は、今回のシンポジウムのパネリストの 1 人でもあったが、アイヌを初めとする先住民の教育について研究している。そのゲーマン氏の勧めにより、土橋の叙事詩のフランス語訳の話が持ち上がったのである。このフランス語訳については、学会誌『ケベック研究』15 号に小倉が書評を書き、このニュースレターの前号でも河野が紹介しているので、詳細はそちらをごらんいただきたいが、ペンリウクは著者の曾祖父の兄にあたり、北海道日高の平取コ

タンの首長だった人である。彼は村の墓地に埋葬されてから 30 年後に掘り起こされ、他の 1000 体余りの遺骨とともに北大医学部の研究用「標本」となった。遺族による激しい抗議活動に屈した大学は遺骨の返還を始めるのだが、ペンリウクの遺骨は、返還予定日当日、「正確に特定できなくなった」との理由で返還を拒まれる。落胆する芳美に、あの世からペンリウクの声が、ときに怒りを露わにし、ときに優しく語りかけてくるのを書き留めたという体裁の作品である。本学会のエティエンヌ・ローウ＝ジョバン会員 (モンREAL 大学大学院) によるフランス語訳が、本年 (2023 年) 3 月にケベック大学出版局から出版された。

以上、2 冊の本が発端となり、日ケの先住民の文学・文化に関する本シンポジウムが企画された。ケベックの先住民と日本のアイヌ民族のあいだには、土地・言葉・文化の剥奪による同化政策など、多くの共通点がある。そもそもこれは、先住民に限ったことではなく、フランス系カナダ人自身が英国による支配下、そして連邦政府の下で歴史的に経験してきたことでもある。さらに、現在世界で起こっている紛争や戦争も、結局のところ、土地・言葉・文化の剥奪による自民族のアイデンティティの危機がその根底にあることが多い。そのような状況の中で、文学や芸術には何ができるのか？ その可能性について考えるのが本シンポジウムの目的だった。

とはいえ、パネリストも含めて、会場の

大多数はケベックの先住民についても、アイヌ民族についてもまだ研究を始めたばかりである。そこで、まず小倉がカナダ(ケベック)の先住民とアイヌ民族についての基本的な事柄を年表とともに整理することから始め、その後、3名のパネリストの報告に移った。

最初の報告者ダニエル・シャルティエは、残念ながら来日がかなわず、録画での参加となったが、「ケベックの先住民の文学的表象」と題する報告をおこなった。まず、伝統的に口承文学を基本としてきたケベックの先住民たち(イヌー、ヒューロン=ウェンダット、アティカメク、アベナキ、およびヌナヴィクのイヌイト)が、今世紀にはいつてから、文字を使用して自己表現をおこなうようになったことにより、一般読者を獲得し外に開かれるようになった現状に触れ、彼らを取り上げるテーマの中でも「領土性」の問題が中心的位置を占めることを指摘した。そして、ジャン=フランソワ・レトルノーの著作を引用しながら、先住民文学における領土とは単なる地理的空間ではなく、「文化を生み出す母胎」としての表象的価値をもつものであること、また、その領土は「新世界」としてではなく、「アメリカらしさ」の概念に近づけて再考されるべきものであることを主張した。

次に、ジェフリー・ゲーマンが「世論を形成し、アイヌの状況を改善するための手段としてのアイヌ文学、アート、パフォーマンスの課題と可能性」について論じた。ア

イヌ民族もまた、とくに明治以降、北方開発や帝国日本の拡大に伴い、土地を奪われ、和人への同化を強いられてきた状況はカナダ(ケベック)の先住民たちと酷似している。北米のように保留地(réserves)がない分、和人の中に埋もれ、和人と何ら変わらない生活を送っているものの、教育水準や経済状況の面での格差は顕著である。しかしながら、近年、アイヌの「文化」を振興するための法律も制定され、状況は改善されつつあるように見える。同胞のエンパワーメントのために闘ってきた多くのアーティストたちの名前と活動を具体的に挙げながら、現状を覆す世論形成のために果たす文学・文化・芸術の役割が小さくないことを指摘する報告だった。

最後に、河野美奈子会員が『『北方の想像界』からみた『Nutshimit』と『アイヌモシリ』』と題する報告をおこない、ジョゼフィーヌ・バコンやナオミ・フォンテーヌなどイヌーの作家たちが描く「ヌーチミット(内陸の土地)」と、アイヌの作家である土橋芳美が描く「アイヌモシリ(アイヌの土地)」を具体的に比較分析した。そして、これらの祖先の土地は作家たちが「書くこと」を通して戻るべき場所であり、祖先と対話し、その記憶をたどる過程は民族が受けた傷からの回復につながるのだと主張した。

報告後、会場からは、日本とケベックにおける少数民族の言語の保存のための取り組み、とくに伝統的に口承だった文学作品の音の解析と保存、現代社会において先住

民文化がクローズアップされることの意義、エスニックツーリズムの課題等について、多くの質問が寄せられ、活発な質疑応答がおこなわれたため、2 時間 20 分の予定時間はあっという間に過ぎた。

今回のシンポジウムは、午前中の自由論題で発表した木下晴美会員の先住民アートとも重なる点が多かった。とりわけ、芸術における伝統の継承と現代性の問題、集団と個の問題、先住民の作家・芸術家と作家・芸術家である先住民の関係等については、文化の可能性の問題とも絡み、さらに考察を深めていく必要がある。今後も機会を見つけて討論を継続していきたい。



シンポジウム (左上から時計回りに、司会の小倉和子顧問、ジェフリー・ゲーマン会員、河野美奈子会員)



(左) 閉会式でのスティーブ・コルベイク副会長
(右) 2023 年度 小畑ケベック研究奨励賞授与式における丹羽会長と受賞者の古澤有峰会員



AJEQ 創設 15 周年記念 特別寄稿

ケベックの始祖 Jacques Cartier の肖像画をめぐって

竹中 豊 (元カリタス女子短期大学・名誉会員)

Jacques Cartier は 1491 年 12 月 31 日、フランス北西部ブルターニュ地方の港町サン・マロで生まれた。彼の名を不朽にしているのは、三回にわたる北米への探検航海、および彼の死後刊行された、いわゆる *Les Voyages* (『航海記』) だ。実際の執筆者は第二回の航海に同行した Jehan Poullet ともいわれるが、確証はない。

第一回航海は 1534 年。ニューファンドランド島北端を経て、セントローレンス湾周辺をめぐる探検航路だった。第二回航海は 1535 年から翌 36 年にかけて。セントローレンス川を遡り、現在のケベック市および

モントリオールにまで達する。そして第三回航海は 1541-42 年だが、ルートはほぼ前回と同じだった。北米におけるフランスの本格的植民活動が始まるのには、承知のように 17 世紀を待たねばならなかったが、Cartier は、その“種”を蒔いた点で、「ケベック史の始祖」ととらえてよいだろう。ところが、この船乗りは実際どんな顔・姿の人物だったのか、となると謎につつまれたままだ。確かに、Cartier とされる図画は歴史上いくつも登場している。だが、どこまで確実な姿なのか。ケベックの歴史家 Gustave Lanctôt (1883 - 1975) は、かつて Cartier カルチエ像をめぐる探究をしているが、本稿ではそれを参考に、以下、“Cartier Iconography”を散策してみよう。

<Cartier 像の誕生>

原型としての Cartier 像はどのようなものだったのか？

まず第一に、Cartier とおぼしき姿がイメージとして歴史上初めて登場するのは、Carte Harléienne (1542-44 頃)においてである。当時、世界の探検航海地図は、船乗りのための実用向けというよりは、王侯用の豪華な装飾作品として奉納されており、そこには新地の風物に加え、航海士の人物像なども描かれていた。それを拡大したのが (図 1) である。



図 1. Carte Harléienne (部分の拡大図)。1542-44 年頃。(British Library, London.)

制作者は不明だが、これは Cartier の第二回航海を元にフランスで作成されている。画面中央で、仲間と会話をかわしているマント姿の人物が Cartier とされる。帽子をかぶり、あごひげを生やし、部下を率いる指導者の姿・・・、これが、カルチエ像の原型として、後世にも受け継がれていく。図のほぼ中央を左右に流れているのがセントローレンス川だ。

第二に、1547 年になると、フランス・ディエップ出身の Nicolas Vallard (生没年不詳) により、さらなる北米東部の地図が作成される (図 2)。これは第三回航海時に現在のモントリオールに到達したときの模様をイメージしたものだ。



図 2. L'Atlas de Vallard (部分の拡大図)。1547 年。(Huntington Library, San Francisco, California.)

赤い胴衣を身につけて中央やや右側に位置し、長槍を手にして何やら指示しているのが、**Cartier** とされる。その容姿・地誌などは、前回 1541-44 年の原型をほぼ踏襲している。ただ今回の図の特徴は、先住民の姿を何人も登場させている点だ。また、画面中央で赤い服の上に黒色の短かいマントを羽織っているのが、貴族出身でフランス国王代理の役目を帯びた **Jean-François de la Roque de Roberval** (1495 頃-1560) だ。向かってその左側にいるのが宣教師であることから、キリスト教の布教も意図していたと考えられる。

第三に、こうした経緯を経て、**Cartier** 像が一層鮮明に描かれるのは、フランスの地理学者 **Pierre Desceliers**(1487-1553)の作成した 1550 年の世界地図においてである (図 3)。



図 3. Desceliers' World Map, 1550 年。(British Library, London.)

これも現在のモントリオールに到達した時の拡大図で、ステレオタイプ化された **Cartier** 像の原型は、ほぼ継承されている。ただ、可視化の度合いという点から見ると、

筋肉質の体型、細面の顔、あご髭を生やし、帽子をかぶり、マントを着ている姿など、既存のものよりはるかに人物像をイメージしやすくなっている。また、この地図では、**Canada** という文字が大きく、しかも 4 カ所に記載されている。

そして第四として、17 世紀にヌーヴェル・フランスを訪れていたイエズス会士 **Louis Nicolas**(1634-82?)によるスケッチの登場である (図 4)。これは、イエズス会宣教師による北米での有名な布教記録 *Relation*(1632-1673)とは別のものだ。羽ペンを用いて、北米の植物相・動物相・先住民の姿などについて、広範な博物誌として記録している。同報告のなかで、**Nicolas** が **Cartier** を描いているが、想像上とはいえ、妻の **Catherines des Grange** 像と共に描いているのは、きわめて珍しい。



図 4. Cartier 夫妻の図。Louis Nicolas。1664-75 年頃。The Codex Canadensis and the Writings of Louis Nicolas, (Ed.by Francois-Marc Gagnon, McGill-Queen's University Press, 2011), 232p.

<Cartier 像の定着>

こうした歴史的経緯を経ながら、19 世紀になると、現在われわれが見るような形で

の Cartier 像が”定着”する。

まず、1836 年パリにて、初代フランス国王 Clovis(466-511)から刊行当時までの服飾史が刊行された。題して *Costumes français depuis Clovis à nos jours* (Fr. De Clugny)。本書は、フランスの服飾の変遷史をイラスト付きで掲載したものだ。そのなかで Cartier を登場させている (図 5)。



図 5. *Costumes français depuis Clovis à nos jours* (Fr. De Clugny, Paris, 1836)

ここでは歴史的事実の無機質的正確さよりも、見た目の感覚的・美的な心地よさが優先される。ファッションの視点から、ケベック史の始祖の姿を意図的に視覚化したものだ。お洒落なマントをまとった姿、あご髭を生やし、横顔だがキリリとひきしまった表情、剛健勇敢、力強さと信頼感を漂わせる暗黙の雰囲気……。これはフランス人のみならず、フランス系カナダ人のイメージにも適うカルチエ像になりえるだろう。

それを裏付けるかのように、後年、決定的なカルチエ像が創作される。ケベックの著名な肖像画家 Théophile Hamel (1817-70)

による *Jacques Cartier* 像だ (図 6)。



図 6. *Jacques Cartier*, Théophile Hamel 作、1860 年。(Archives publiques du Canada, Ottawa.)

Hamel はケベック州政府の公認肖像画家だったこともあり、19 世紀でもっとも成功した肖像画家だった。歴史上あるいは同時代の重要人物を数多く描いており、そのなかにはケベック政治家 Louis-Hippolyte Lafontaine(1807-64)も含まれている。ともあれ、図 6 は今日もっとも広く受容され、流布され、そして定着している Cartier 像だ。

ならば、同作品誕生の背景はどのようなものだったか。まず、1835 年は Cartier のケベック到達 300 周年記念にあたっていた。これを機に、生まれ故郷のサン・マロ市では、Cartier の肖像画が制作されることになる。描いたのは、当時著名なロシア系フランス人 François Riss(1804-86)だった。他方、若き Hamel は 1843-46 年にかけてフランスやイタリアを中心にヨーロッパにて画業に励んでいた。1844 年には、このサン・マロ市を訪れており、幸いにも市庁に飾られている Riss 作のカルチエ像を模写していた。それが、結果的に功を奏することになった

のは、Riss の作品が後年、行方不明になったことによる。今日、巷に見る Hamel 作の Cartier 像は、したがって彼の完全な独創でなく、実は、Riss の原画に影響をうけて制作された創作とってよいだろう。

翻って、ではなぜケベックでは 19 世紀になって、フランス系による「歴史への回帰」志向が浮上してきたのか。ひとつにはケベックでは、1830 年代のイギリス系に対する政治的反抗の失敗と挫折を経験した後、その屈辱をはねかえすかのように民族的アイデンティティへの模索が育まれていったことによる。今ひとつは、前者の延長として、Cartier をケベック史の始祖と位置付ける発想の再確認、言い換えれば、目に見えるかたちでの自分たちの歴史的英雄像の“発明”が、時代の要求に合致していたことにもよる。

ここで、Hamel の描いたケベックの「英雄像」に目を向けてみよう。すでに見たように、16 世紀の北米地図のなかで Cartier 像が登場していたが、数世紀を経ても、いったん出来上がったこの原型を根底から覆すほどの発想は育まれなかった。ただヴァリエーションをつける形で、Cartier 像が再生されていったのだった。

とはいうものの、Hamel の Cartier 像には、なるほど Riss の描いた作品に着想を得たであろうとしても、いくつかの点で独自性が読み取れるように思われる。一般に、Hamel の描く肖像画には、「威厳さ」・「真実らしさ」・「過剰表現の回避」の 3 要素があると

される。それを踏まえたうえで、彼の Cartier 像をよくよく観察してみると、そこには、「勇者」としての表情、冷静で自信に満ちた「落ちつき」、思慮深く「威厳」あるポーズ、頑健で均整のとれた「体型」、海にたいする深い「郷愁」などが窺える。それは、海の荒くれ男にありがちな傲岸不遜で高ぶる心の姿でない。ましてや、権力をこれ見よがしに誇示する暴君像でもない。となれば、Cartier 像の歴史的信憑性はひとまず置くとして、この像こそは、ケベックの始祖の似姿とするのに相応しいではないか……。おそらくケベック社会で、Hamel の Cartier 像が定着していった理由は、こんな点にもあるのだろう。

かくして 19 世紀後半以降に登場する Cartier 像は、(図 7) のように 1855 年の切手のイラストなどを含めて、ほとんどすべてが Hamel の作品を元にして描かれる。

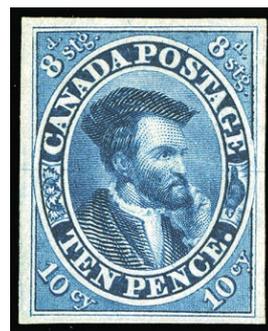


図 7. Jacques Cartier の切手 (1855 年)

さらに、1934 年に制作されたフランス人画家 Pierre Gandon(1899-1990)によるカルチエ像は、巷間でよく目にするもう一つのイメージだ。同作品は、Cartier の第一回航海

(1534)でカナダ到着 400 周年を記念して制作されたものである (図 8)。



図 8. Jacques Cartier, Pierre Gandon 作、1934 年。(Bibliothèque nationale, Paris.)

16 世紀における彼のカナダ探検航海の意義について、ここで詳しく触れる余地はない。ただ、この航海の目的 (植民活動の開始、鉱物資源等の探索、アジアへの航路の模索、「フランスの栄光」の拡大等) という点からすれば、それは決して成功物語ではなかった。むしろ、あらゆる活動には「限界」がある、という歴史の教訓を残してくれた、と解釈するのが一つの見方かもしれない。「限界」をわきまえ、「限界」を知り、そして「限界」を愛する節度ある態度……。彼の肖像画を通して浮かびあがってくるのは、そんな一人の探検航海士の姿である。

しかしこう言いつつ、どうしても脳裏から消え去らない言い草がある。曰く：

《名画はいつでも嘘をつく》……。

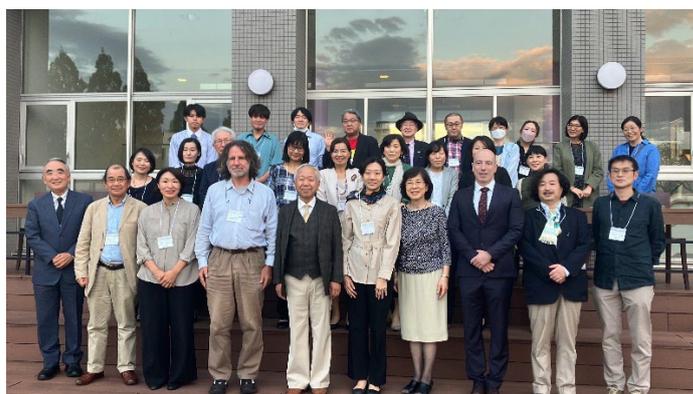
(主な参考文献)

La Découverte du Canada, tome premier, Les Voyages de Jacques Cartier, Les amis de l'histoire, Montréal, 1969.

Le monde de Jacques Cartier, éd. Claude Paulette, Libre-Expression, Montréal, 1984.

Théophile Hamel: peintre national(1837-1870), Raymond Vézina, Editions Elysée, Montréal, 1975.





閉会式後の集合写真

●編集後記●

年度末に差し掛かる時期の刊行となり、大変恐縮な限りですが、2023 年度 AJEQ 全国大会特集号をお送りします。特に今回は 15 周年記念企画報告や特別寄稿などもあり、非常に充実した内容となりました。日本ケベック学会の活動がますます発展していくことを心より祈りつつ、会員に皆様におかれましては、今後ともご協力のほど宜しくお願い致します。(IH)

AJEQ ニュースレター

年 2 回発行

発行人：丹羽 卓 編集人：廣松 勲